

# さんぽみち



発行 わがまち大田鶴の木地区推進委員会

連絡先  
鶴の木特別出張所  
3750-4241

# 明るく元気で2000年！

## ～在宅介護研修会～

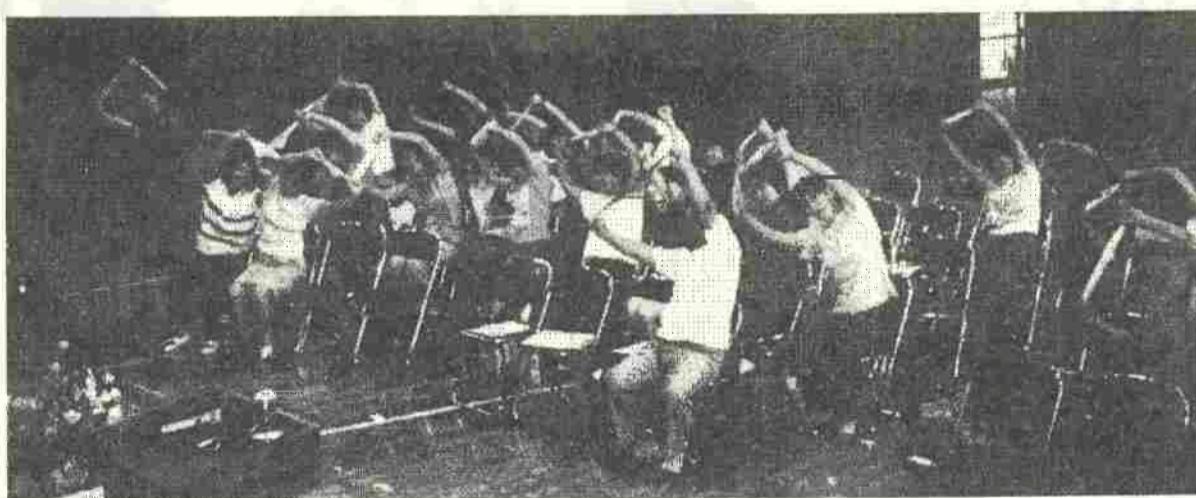
くがつのすい返すのでつ本たるちいしつく歩らく出。てし。でゆすた入りの前に相手葉が、早くタタ」とせきたててく動て来まあ聞ま。る。りの前で相手葉が、粗相のあることは当ようかもひらかたこたは注意してしまふ。このことだそうちもくらはる。これには同じことを何回もくり返す。根気よく聞よし続けることが原則だ。そうでもう自分内での事は、少々きづけること。なうべにななきづけること。

講師は大田区保健福祉部の丁寧なお金で、健婦さんは芳田さん、児玉さん、さわやかに身体を動かしました。さすがベテランの看護婦さん、初めて聞くことも多く勉強になりました。お話を中で老いた介護は、大変な労働であり、この精神的にも重いもので、この高齢者の急激な増加が予想される中、人々の気持ちの大切さを感じました。

初めての企画でした。真夏のつづく暑い日、第三小学校P.T.A.の若いお母さん方、男性も含む約50名の参加を得て、汗を流しながらの充実した会でした。

鶴の木東町会  
池田文化部  
敬子

「在宅介護を考える」



## 実技の様子

東調布第三小学校体育館にて（平成11年9月18日）

「自分は高齢だから出来ない」と、あきらめず気持ちを明るくしつかり持ち外へ出ていろいろな方と、会話を持つこと。そしてどうしても、自分で無理な場合は、行政サービスを遠慮なく利用すること。本当に大事なことだと思想いました。

介護を受ける方もさせていただく方もやはりお互いの気持ちを思いやつて、仲良く生活で生きれば最高だと思います。

ひと昔前は、老後は病院に入  
れひよればよい。・・・一と簡単に考えて  
つないましめた。しかし子どもも少なくて  
つたり、家族のあり方も大きく変わ  
つて来ましたし、物が溢れ、何か  
時代にとり残されたような感のあ  
る世の中になっています。そのよ  
うな時代の中で在宅でいつまでも  
生活して行けるよう自分自身の健  
康を作り出す努力をしなければと思  
つてあります。

今年は、介護保険制度が始まり  
ます。ながなが老後は一筋縄では  
参りません。健康に留意し、皆さ  
ら暮らしていきたいものです。なが  
ら暮らしくしていき心を持ちなが

当田は、主催した鶴の木東町会  
佐藤会長の挨拶と、鶴の木特別出  
張所の平山所長さんのお話もお聞  
きしました。所長さんには、今回  
この会を開くことで大変お世話に  
なりましたが、ご本人も家庭介護  
でご苦労なさつておられることが  
伺えました。

わがまちあの人この人

鶴の木東町会会長 佐藤大助

間もなく1999年に別れを告げようとしています。戦後始まつたテレビ放送も、白黒よりカラーへ更にハイビジョン放送に、ビデオ放送へと移行し、2010年には現行のテレビ放送は全てデジタル放送へ移行する予定です。

戦後50有余年情報・技術等は世界に遅れをとることなく目覚しい発展・進歩を遂げれど、どこまで研究開発が進むか計り知れません。

反面日常生活に於いては理解出来ないようなモラルの低下、凶悪な犯罪等日々マスコミを賑わしていきます。2000年を迎えるに当たり、安心して暮らして行ける明るい町作りの為にも努力を惜しんではならないと思います。

鶴の木二丁目 田沼 昭二

（南久が原二丁目 池田 進太郎）

## 「子ども110番」について

千鳥小学校 P.T.A 会長 松嶋 雅楠

皆様は「あんしんわがまち」と書かれた黄色のステッカーを目にされたことと申します。子どもの安全を地域全体で守るという趣旨のもとに、本校校区の町会（千鳥北、千鳥南、矢口）、「商店会」、並びに池上警察署のご協力で、昨年10月より75軒の方々に掲示してあります。ステッカーで、次のような意味がござります。

被害を受けそうになつた時にかけこ  
める場所となる。子どもが困つた  
不審者だけでなく、状況においこまれたときには助けを求  
められる場所となる。

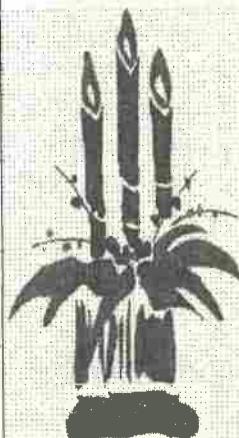
地域の中での抑制力となる。  
見守られ、育てられて  
いるという、子ども達の意識を高める

あんしん わがまま



このマークが  
目印です！

	内管所出張特別木の木鶲
人	男 10, 590 名
	女 10, 968 名
口	計 21, 558 名
世帯数	10, 395 世帯



編集長 池田 進太郎

編集後記

幼きがママを手伝い新聞を  
重ねておりぬリサイクルの日に

茶髪青年 わがシルバード | 道路工事の力 | をかつき渡りぬ

草いきれ 身にまといつつ 久に見し  
葛の花びら そとふれて見ぬ

短歌

南久が原二丁目 板倉 正子